

序

書店の医学書のコーナーを訪れると、徐々に、自分よりも卒後年数の若い筆者を見つけることが増えてきました。ただし、漢方（や東洋医学）に関しては、他の医療分野に比べて、大御所とよばれる諸先輩方の書籍がまだまだ多いと感じています。その理由の一つには、漢方は、エビデンスを調べるというより、症例の治療経験を重ねていくことで習得や上達していくという要因が強いからと予想されます。

本書のテーマを、若手の医療者でも、なるべく自力で漢方を学ぶことができる書籍をめざすとしたため、卒後20年を超えた自分だけでなく、若手の編集者を探すこととなりました。池田先生、蜂木先生とはじめてお会いしたのは、お二人とも学生時代の頃で、学生主催の家庭医療×東洋医学のイベント（2016年）に、共同講師の一人としてお誘いいただいたときと記憶しています。お二人とも、家庭医療や東洋医学をすでに学んでいて、イベントの準備から当日の進行まで、その企画力や実行力に感服したのを今でも覚えています。その後現在も、医師となった両名は、西洋医学とともに東洋医学を実践されています。そのお二人のアイデアが書籍全体に（付録を含めて）散りばめられています。

また、いろいろな流派がある漢方の世界で、基礎的な内容をなるべくカバーできるように、漢方医学、中医学、生薬の分野について、エキスパートの先生方にまとめ役をご依頼しました。集まってきた原稿を読む中で、私自身、忘れていたり、はじめて学ぶ内容もあり、加島先生、吉永先生、牧野先生をはじめ、各項目を執筆いただいた先生方に感謝申し上げます。

初期研修然り、われわれ医師は、若い年代では、西洋医学を中心にまずは満遍なく学んで基礎をつくることが大事とされています。一方で、漢方については、いつ学びはじめても遅くはないと個人的には考えています。すなわち、卒後何年経っていたとしても、漢方を学びはじめた、もしくは、これから学んでみたいと思う人は、本書が対象としている「若手の」読者に該当するとも考えられます。

思いつくままにアイデアを出していった結果、だんだん企画が壮大となり、当初の予定よりは完成がやや遅れたものの、羊土社編集部の寺山様、庄子様には、想定以上に編集者からの提案を具体化していただき、改めて深謝申し上げます。

冒頭にふれた、漢方の大御所の先生方の書籍と、若手の読者とをつなぐ橋渡しの役目にもこの書籍はなり得るのではと期待しています。そして本書が、漢方をもっと学んでいきたいと思う読者にとって、末永く愛される書籍となることを願っています。

2026年8月

檜尾明彦